

平成 13 年度香小研国語部会

研究テーマ

改訂学習指導要領の趣旨に沿った国語科学習

1 研究テーマについて

改訂学習指導要領の趣旨は、習得した知識に基づいて、自ら考え、問題を解決する能力をめざそうとすることであり、学習する意欲の醸成を考えながら、基礎・基本は確実に習得した上で、それを様々な場面で実際に活かしていく力の育成をねらうものである。小学校国語科においては、具体的な言語活動を通して、日常生活に生きて働くものとして必要な、話す・聞く、書く、読む基礎的・基本的な力をバランスよく育成することを重視している。

この趣旨を受けて、教科書も大きく様変わりした。教材集の色合いが強かったものから、ねらいを焦点化したほぼ一月1単元の構成のものになり、「学習の手引」が充実して国語科の基礎・基本が身につくように工夫されている。

この教科書を使用して改訂学習指導要領の趣旨に沿った国語科の授業を展開すればいいのであるが、実際にはスピーチをする、ディベートをするという言語活動は行われても国語科としてどんな力が付いたと言えるかはっきりしない授業も少なくない。また、これまでの経験をもとに旧態依然とした指導を抜けきれない状況も見られる。教師の多くが新しい国語科の授業のイメージを持っていないために停滞し、とまどっているのではなかろうか。

そこで、平成12年度、新しい教科書を使用し、改訂学習指導要領の趣旨に沿った国語科の授業はどうあるべきかのイメージを具体的に探ることにした。

夏季研修会においては、1学期の単元を特定して、具体的な指導場面レベルでの主張点をぶつけ合うパネル討議形式で協議し、指導者の吉永幸司先生にも、模擬授業形式の具体的な学習指導の在り方を指導していただいた。

成果として、目的意識や相手意識を明確にもった多様な言語活動によって、日常生活に必要な話す・聞く、書く、読むなどの基本的な内容を繰り返し学習し確実に言語能力を育成することの有効性が確認された。また、各領域の基礎的・基本的な力の系統性を見出そうとしたことは広く会員の評価を得ると同時に、大きな課題として改めて浮かび上がった。すなわち、各領域の基礎的・基本的な力とはどのようなものか、その系統性をどう把握しておくべきか、その力を具体的な言語活動のどこでどのように指導するのが有効か、等である。

平成13年度は、この課題を中心に据え、具体的に、本時レベルでの国語科学習の在り方を探っていきたい。

2 研究内容

国語科の基礎・基本については、学習指導要領に示された各領域の指導内容が『基本』であり、『基礎』が言語事項であると捉えておきたい。しかしながら、このままの捉え方では抽象的である。単元、本時レベルに具体化しなければならない。その具体化の際に、単なる知識、技能としてではなく、実生活に生きて働く力として見極める視点が大切である。

このことを踏まえ、次のことを研究の内容とする。

国語科の基礎・基本の力をどうとらえるか

例えば、中学年の「書くこと」の内容に「ウ 自分の考えが明確になるように、段落相互の関係を考えること。」「エ 書こうとすることの中心を明確にしながら、段落と段落

との続き方に注意して書くこと。」がある。これを受けて、第3学年の教科書5月単元「自分のことを友だちに知ってもらおう」、同じく第4学年「写真や絵を見て伝えよう」が配置されている。このことから、基礎・基本をどのように捉えるべきであろうか。

3年では自分のことを友だちに知ってもらおう目的で、自分の特徴を多面的に書き出したメモをもとに文章表現する。4年では思い出深い写真や心に残っている絵を紹介する目的で、文章表現する。このことから、書くことについては、3年では「友だちに知らせたいことがらごとのまとまりと順序を考えて書く」、4年では「何を中心に紹介するか、その前後に何を説明したら分かりやすいか考えて書く」ことを育てたい基本の力と分析する。逆にいうと、3年の本単元では「知らせたいことを中心に考える」という力をねらう必要はない、4年の本単元では、前学年で身に付けた「ことがらごとのまとまりを考えて書く」力を踏まえた上で「中心をはっきりさせて書く」力をねらう必要があるということである。

さらに、生きる力に培う生きて働く国語の力として見た場合、どのように基礎・基本の力を捉えるべきであろうか。

第3、4学年の5月単元は、級友に対して話す、書く活動として組織されている。このことから、友だちから質問や意見という反応をもらいながら「知ってもらうためには、まとまりを区切って書くといいのだな。」「分かりやすく説明するには、説明したい中心の前に5W1Hの説明を入れるといいのだな。」等と、目的意識や相手意識のもとに自分なりの文章を書く際の見方、考え方を広げたり深めたりしていく「書き方」を身に付けさせたい。このような「学び方」が実生活に生きて働く力に結びつく。

基礎・基本の力をどのように育成するか

例えば、先述の第4学年5月単元で言えば、「何を中心に紹介するか、その前後に何を説明したら分かりやすいか考えて書く」力が、学び方としてどの子にも身に付くようにするためには、どのような指導法が有効であろうか。

生きて働く学び方として獲得するためには、目的意識や相手意識が強化され、書く必要感や意欲を醸成することはもちろんのこと、子どもが書いたものを学習材として友だちと読み合い、より分かりやすい文章にするためのポイントをまとめたり、よくなった点をノートに記録して自分の文章の向上を確かめたりする場を設ける等の工夫が有効であろう。

また、どの子どもが基礎・基本の力を身に付けるための各時間の細かな支援としては、移動可能な付箋紙を用いた構成メモの工夫や、学習内容の焦点化を図るワークシートの工夫等、多様な支援が考えられる。これまでの経験を含めて県全体の叡智を結集したいものである。

3 研究の方法

(1) 研究対象

移行期間中であり、平成14年度のスタート時点で新学習指導要領の趣旨に沿った国語科学習が県内のどの学級でも展開されることを願い、言語事項を含めて、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域全てを研究対象とする。

、の研究内容があれば、教科書以外の学習材を用いた教科書に掲載された以外の単元として実践することも差し支えないが、国語科を専門的に研修していない教員をも視野に入れた県下全体への寄与を考えて、教科書にある単元の実践を中心としたい。

(2) 研究方法

各都市の特色ある研究を母体として進める。

夏季研修会を、各都市の研究の(中間)発表の場ととらえ、研究成果を交流する。

研究のまとめは、冊子「国語科教育」として配布する。